

# ふるさと奥尻通信

令和3年7月30日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局:01397-2-  
3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭言

明治11年に開拓使によって島に放たれたシカは、30~40頭に増え、冬場は幌内温泉のかたわらに集まったという。明治19年の話。今ではタヌキがウロウロ？

## 特集 幌内温泉と集落跡の歴史

奥尻島の西海岸の北西部に幌内地区と呼ばれる場所があります。北国岬から北側一帯は砂浜の続く湾になっていますが、ここには幌内川が流れ込んでいて、波の穏やかな日には天然の湊(みなと)とも言える景色です。今回は幌内地区の歴史について振り返ってみます。

古い地図を広げてみると、1850年代(安政年間)に作られた絵図「西在八ヶ村・久遠・太田・奥尻島略図」において「ホロナ井」と記され、幌内川の左岸には「ランセン」という表記が見られることから、すでにこの頃から温泉が湧いていることが知られていたのだと解ります。幌内の地名は、そもそも北海道各地に残る「ホロナイ(幌内)」の呼び名がアイヌ語の「ポロ ナイ=大きな川」に由来するとされますので、奥尻の場合も同様、島内でも比較的水量のある幌内川のことを指して、そう呼ばれていたと考えられます。

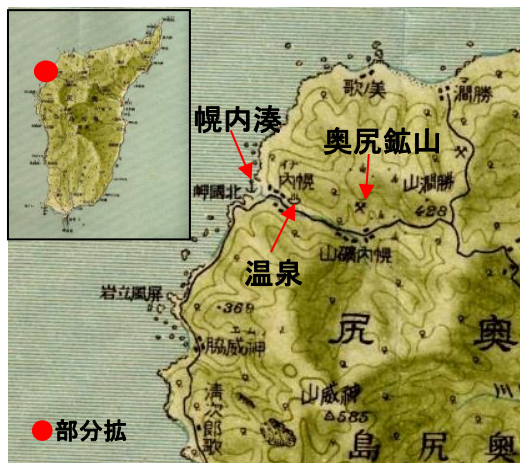
江戸~明治中期の頃は資料がないために不明確です。幌内地区が目立って来るのは、明治時代末期から昭和初期にかけては、その上流部に硫黄鉱山が開かれて栄えた頃からです。



幌内温泉ボーリング 昭和41年



幌内荘と北国岬 昭和60年代



幌内地区位置図 1:20万地勢図改変



奥尻鉱山幌内湊 明治末~大正初期

### 幌内地区関係年表

1850頃	「ホロナ井」、「ランセン」の表記
1908	奥尻鉱山発見
1911	鉱山が本格的に操業開始
1956	大橋教授らが幌内を踏査
1959	奥尻村が温泉郷建設を計画
1966	幌内温泉資源調査ボーリング
1971	国民宿舎「幌内荘」オープン
	密航監視用の沿岸監視哨を置く
1980年代	池島氏、藤巻氏、成田氏が幌内居住
1990年頃?	役場が住民用の温泉施設建設
1993	南西沖地震津波被害で集落消滅
同年	幌内荘休館
2001	産業開発道路開通
同年	幌内荘撤去
2017	地熱発電稼働

明治44年より、河口から2kmほどさかのぼった辺りに硫黄鉱山が開かれました。島外から鉱夫や家族らの移住があり、2,000人も人口があったと言います。硫黄の製品(塊)はトロッコで運搬され、幌内湊で汽船に積み込まれて輸出されました。膨大な量の埋蔵量があるように思われた鉱床でしたが、大正末期までには産出量が激減し、閉山してしまいました。鉱山時代から鉱夫用の温泉施設も造られていたようですが、閉山後は廃れてしまいました。

その後、昭和31年に秋田大学の橋本良一教授らが離島調査で訪れ、幌内一帯が温泉湧出の可能性が十分あるとの折り紙をつけました。調査結果を参考に、同34年には村(当時)が奥尻島の温泉郷計画を検討し始め、幌内、神威脇、宮津、東風泊の4箇所が選定されました。昭和41年(1966)に、幌内地区で町による本格的な温泉ボーリングが行われ、同43年には「洋々荘」(奥尻港横)の経営を町から引き継いでいた高橋永達氏が温泉旅館を開業。同46年にはさらに温泉井戸を掘削(跡地に現存)して、同49年より国民宿舎「幌内荘」として経営しました。

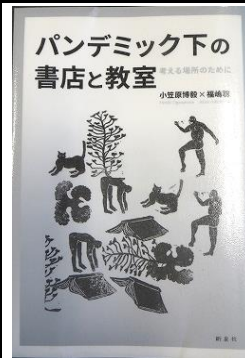
幌内湾の後方には数軒の家屋が並んでいて、漁業経営を中心とした小集落がありました。夏場の磯回り漁(アワビ、ウニ、海藻など)や冬場の岩ノリ獲りなどで稼ぎましたが、昭和50年代に道路が整備されると入稼者が多くなり稼ぎが減ったそうです。平成5年の地震津波により、集落と温泉は終焉を迎えてしまいました。一方、鉱山経営が廃れた後、幌内地区の山間部は無人となって廃れていきました。その後、何度かの地熱開発用の井戸の掘削が行われて有用性が検討され、平成29年からは地元事業者によるバイナリー方式での地熱発電が行われいま



幌内湾と北国岬(中央)



昭和60年頃の幌内荘です。幌内湾の河川敷近くに掘った温泉井戸からのお湯を引いた天然温泉が自慢で、真裏には幌内の砂浜が広がり、海水浴や夏のレジャーに最適でした。平成初期ころには、季節営業となっていたようですが、泊りがけでの役場の親睦会会場に使われたりもしていたそうです。今では取り壊されて更地になっていますが、近くには当時の温泉井戸が残っていて、未だにお湯が出ています。



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

パンデミック下の書店と教室  
小笠原博毅・福嶋聡

コロナ下、書店に本を買いに行くことは、はたして「不要不急」の控えるべき行為か。対面授業の消えた大学の教室で、学生と教員は何ができるのか。書店も教室も平等に開かれた場所でなければならないが、非常に危うい立場でもある。書店店長と大学教授が交わした往復書簡からパンデミック下で生きることになった人類への問いかけと、指針が見えてくる。



奥尻のつり 春号



春の釣りシーズンを回顧してみます。昨年に引き続き春のホッケは大漁続きで、宮津周辺ではホッケの群れが渦を巻く現象が何度も目撃されていました。一度に百匹も釣った釣り人もいたとか。GW連休には、島外の釣り客の姿も少々見られ、島の大型釣りを堪能していました。波の穏やかな日をねらって西海岸の北国岬やペンキ岩ではカレイやヒラメを求める人が多く、今年はカレイが濃かったようです。屏風立岩などのベテラン向けの岩場では、60cm級のクロゾイの超大物が2匹も釣れたということで、離島のポテンシャルの高さを実感。5月中、ヤリイカが港に出入りすることが1週間ほどあり、マイカとは違う味覚を楽しみました。マイカ漁は6月より解禁され、夜の球島山に登れば、奥尻海峡に広がる漁火を見ることができます。

奥尻の詩句 第1回 句集「汗の詩」脇田道雄

昭和5年(1930)奥尻島宮津生まれ

漁獲高直ぐ生計に響く日日	荒波に挑む漁夫の覇気を見せ	現代っ子魚の名前知らず食べ	長靴と合羽が似合う漁師です	助宗のみにくさ卵が銭になる	漁夫の妻いつも新婚さが匂う	三食も魚料理で飽きぬ漁夫	大海を知らぬ若さがいて困る	魚市場のない故郷の港町	集魚灯夜の銀座を思わせる	漁夫の眼
--------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	--------------	---------------	-------------	--------------	------

あて泉変した久中たどやア  
りにも更たガ々止。二就 | 町  
まらつと。イのと昨十職が教  
しうい、今ド登な年五で開委  
たなてソ回も場つは名移催主  
。ど詳ムは張にてコ余住さ催  
新しり見り説い口がしれ岬  
しい工学切明たナ参て今岬  
い説にコつをの下加き年め  
展明島 | て担ででした度ぐり  
開をのスイ当、開ま方転り  
もし温のまし 催しな勤ツ

岬めぐりツアー実施



見つけた石積み

しま物りやはいせ形すたら組にて  
よせで、や、て、に。断れを浸み先  
うんあ人黒踏あさ石砂面で見食た日  
か。る工つみりらををのちつさと  
。鉱このぼ固まに上掘ようけれこ  
山とにいめす扁手りううまたろ  
時は築土ら。平に込にどし海、集  
代間かがれそな組みな真た岸、冬  
の連れ載たの丸み、っ横。に。場  
名いたつよ上石合逆てか波謎の歩  
残あ構てうにをわ三いらにの荒  
でり造おな 敷 角ま見削石波い

幌内集落跡に謎の石積み

見も見どにぎいとチい月、  
え、しつ、おててかンま、新  
てかれめあ出いも、なだ、年  
るがいてみつけ。月だオ、ス  
かえ。るジでい日かリコ半、タ  
も。何のツきいはんンロ年、ト  
ないないもけ、ど言ク、だ、て  
の日のとれ気んつ、だ、ワ、し  
に常かを 軽過て、ク、ま

新卒之記録 (編集後記)

う想的資示援鍵か二新年館營  
制像な料し物盤ら十たすとす業  
作し出をま資ハ引五年なりが、  
意て来用した残モ揚年展しま、  
図も事を。りニげ青物し、開  
がらをる。りニげ青物し、開  
あい個こ被なカ、れ岬し。そ  
りた々と災ど、れ岬し。そ  
まい人でしを当た沖て、そ  
す、の、た常時人の、こ、満  
と中衝実設の形海平で、二  
いで撃物展救と底成、十

津波館に展示物追加



2016年度成人式記念缶バッチ